

桜花の詞（作者不詳）

薄命 能く 伸ぶ 旬日の 寿

納言の 姓字 此の 花を 冒す

零丁 宿を 借る 平の 忠度

短歌 行きくれて木の 下陰を宿とせば

花や今宵の主ならまし

吟詠 風を 怨む 源の 義家

短歌 吹く風を 勿来の関と思へども

道もせに散る山桜花

滋賀の 浦は 荒れて 暖雪 翻る

短歌 さざ波や 滋賀の都はあれにしを

昔ながらの山桜かな

奈良の 都は 古りて 紅霞 簇る

短歌 いにしえの奈良の都の八重桜

今日九重に匂いぬるかな

南朝の 天子 今 何くにか 在す

芳山を 望まんと 欲すれば 路 更に 賒かなり

薄命能伸旬日壽

零丁借宿平忠度

滋賀浦荒翻暖雪

南朝天子今何在

納言姓字冒此花

吟詠怨風源義家

奈良都古簇紅霞

欲望芳山路更賒

解説 桜の花は日本の国花である。日本人が古今を通じて、広く深く愛する名花である。この花に寄せて作られた平忠度・源義家・千載集掲載の和歌を拾い、この和歌にうたわれた情景を連想し、桜の名所、吉野山に思いをはせ、南朝の歴史をしのび、後醍醐天皇をはじめ、吉野におられた南朝の天子の御霊を拝する心情を詠じたもの。

語釈 ※薄命 生命の短いこと。※旬日壽 二ここではきわめて短時日の意。

※納言姓字 藤原成範は深く桜を愛し、その邸に多くの桜を植えたので桜町中納言と呼んだ。※冒 踏みこむ。※零丁 うちぶれているさま。

※借宿 平忠度は桜花の下に宿を借りて和歌を詠じた。※吟詠 詩歌を作ること。※怨風 源義家が勿来の関のあたりを過ぎる時に詠じた詩。

※滋賀浦 これは『千載和歌集』の歌。※暖雪 桜花の散るさまを雪にたとえた。※奈良都 伊勢大輔の歌。※紅霞 花かすみ。※簇 いっぱい広がるさま。※南朝天子 南朝の後醍醐天皇。※除 遥かなたに遠く。

通釈 桜の短命を嘆き、せめて十日の寿命を賜わりたいと願った藤原成範は桜の花にちなんで、みずからを桜町中納言と名乗ったという。都を落ちていった平忠度は、桜花の下に宿を借りて和歌「行きくれて…」を詠み、風にひるがえる落花を鎧の袖に受けた源義家は、「吹く風を…」と詠じ、『千載集』の歌人は、「さざなみや…」と詠い、また伊勢大輔は、「いにしへの…」と詠んでいる。桜の花を詠った和歌は多いが、桜花の名所といえば吉野山。その吉野山におられた南朝の天子は、いずこにおわしますのだろうか。吉野山の方を望み見れば、道は遥か彼方である。